

ビフォア・スクーリング

——子どもの心とからだを汚染から救わなければ——

周 郷 博

本題に入る前に

ぼくは、お茶の水幼稚園をやめて五年になります。渋谷の家で島をやって、時々失敗をしたり、あまりお金もありませんし、いやになることもありますが、ずーっとやってきました。でも、アルジェリアの詩人ナセルディーンさんも言っています。この人は、世界相互理解連盟なんているのを一人で作ったりした、ちょっと変わった人ですが、“おいしい物を食べて何もしないで遊んでいると疲れる”というのです。本当にそうですね。食べること

をへらして、自分のすることを一生懸命にする、そうすれば心が落ちついて、心にゆとりができて、人を傷つけることもなくなります。外山君（外山滋比古氏）は、常識的なことを適切ないい言葉で表現して、今なかなか有名だけれど、このナセルディーンさんの言っていることは、常識とは逆のことです。ここところ、面白いですね。

ぼくは、去年中国から帰った時、日本の女の人が大勢いるところに行っても、それが女ではないような感じ、子どもを見ても子どもでないような感じ、つまり、人間と会う喜びがないような感じをうけてたまりませんでした。でも、ついこの間八丈島へ行き

ました。二度もきまった日が天気が悪くて、やっと三度目にプロペラ機で行ったのですが、むこうはあらしでした。そして三泊四日いて、最後の日はいいお天気でした。その八丈島でぼくは、とてもいい人たちとめぐり合いました。というのは、本土の人と違って、無邪気でうそがないんです。そして「昔」をもっていない。つまり大地から離れない生活をしていて、そこが本土の人たちと違う、と思いました。

つい昨日まで、今度は諏訪へ行ってきましたが、そこでもぼくは元気が出ました。諏訪には、ぼくのただ一人のお医者さん、小松先生がいるんです。ぼくはこの先生にしかみてもらいません。ぼくのからだは、そう誰にでも見せるものじゃないんですから……。ところがこの先生が、実は病気をして、その病気がなおったのでぼくに会いたいといったのです。先生はもう診療を始めてるわけですから、それが終わるのを待ちながらずい分たくさんご馳走になって、それで夜おそくまで話をしました。この場合、先生は病人であると同時に医者だったわけですね。それで、診察ばかりしていた時にはわからなかったことがわかって、今までしていたことが違っていたのではないか、ということがわかったそうです。患者は医者にべったりよりかかってはいけないのね。患者自身は病氣とたたかう精神力がなければならぬ、ということが、

患者となつてはつきりしたということです。

こういうこと、幼児と保育者の関係でもいえるんじゃない？

今、現在、育ちつつある幼児の側にたつて考えるというかかわり方、これが今はよそよそしいものになっているような気がします。親子でも同じだと思えます。そして——「今までのきまりきった教育」というワクからはみ出さないと、「本当の教育」もわからないのじゃないでしょうか。小さくこり固まった頭を、人生というか、世界へ向かつて開放して風にさらすことが大切だと思います。「風に吹かれて」のボブ・ディランとか、ジョン・デンバーのように、人にへつらわないで、あまりペラペラしゃべらないで風に吹かれる、それがいいですね。

だいたひ横道にそれました（道草）が、今日話したいと思つていたことに入ります。

◇ ◇ ◇

岡潔先生も、なくなりましたね。その岡先生は、人間の中心は情緒である、といわれました。その上に脳 Brain があるのです。情緒は Mind（英）Le cœur（仏）です。そして情緒と共に意志欲望があり、それらをつつむからだがあるわけです。

諏訪に行った時、あたりの景色を見ていてふっと実朝の歌がう

かびました。実朝は源頼朝の息子で、鎌倉で殺されましたね。でもあの公暁の隠れていた大銀杏はまだあります。その歌は「けさ見れば 山はかすみて久方の 天の原より春はきにけり」というのです。誰でもできそうな歌だけれど、実に情緒がありますね。「天の原から春がくる」これは日本独得のものなのです。外国では「地平線」というのが多いのです。

この「情緒」というのは、子どもが生まれた時、からだと一緒にもってくるものです。「宇宙船地球号」という呼び名の張本人アメリカのバクミンスター・フラーも、この惑星―地球号の未来を確かなものにし得るものは、BrainではなくてMindである、とっています。パスカルもパンセの中で、「理性の与りしらないろいろなことを解決するのが情緒 *Le cœur* である」とっています。ですから、あまり早くから頭にいろいろつめこむと、あとでほんとうのもの（真理）が入ってくる余地がなくなってしまう、（入り口がふさがれてしまう）、これは胃袋も同じです。脳という腹は、すかしておいた方がいいのです。

教育雑誌を見ましたが、いろいろ考えさせられることが出ています。宮城教育大学の林竹二先生は、「人間はほかの動物とどう違うか」という授業を百回以上もして全国を回っている人ですが、これはベトナム戦争後のアメリカでもとりあげていて、こう

いうやり方はいいと思います。

それから、家庭の重要さの認識も、もっともって考えられなければいけません。殺人事件をおこした中学生の家庭、あれは家庭じゃありません。喫茶店や売春宿のような家庭がふえてきています。もちろん、昔とは違った家庭であるべきですが、大切なことは、家庭が愛によって結ばれているかどうか、です。そして、そこに生まれ育っている子どもが、親を信頼しているかどうか、ということです。ですから、「人間」に驚きを見いだすという、林先生のような授業がいいということです。

それから驚いたことに、一歳半の保育園児にして、もう何の意志もなく手足がなえた子、ゆうれいのような子がふえているというのです。それで思い出すのですが、ぼくが園長をしていたころに、卒園児が園長室に来て、「園長先生、ながながお世話になりました」といいます。これがMindから出た言葉でしょうか。

つぎに、虫歯の多くなったこともたしかな事実です。歯というのは骨ですね。したがって骨もとても弱い。そしてからだが疲れやすいのです。ことに背筋力がきたえられていないのだと思います。四つ足で歩いていたものが、人間となって初めて立って、「遠くを見ることができ」、「手を使うことを覚えた」のです。そしてこそ *intelligence* が働き出すのです。この言葉は、ラテン語

の Ingentiv 創り出す、ということからきています。ピアジェも今では intelligence も知能テスト用になってしまった”といっています。

それから、反射（本能）も弱っているのです。この「反射」というのは一つの本能で、本来知能は本能に根づいて発達するものなのです。何かが突然目の前にあらわれても目をつぶらない。すぐころぶ。そしてそのころび方も大変まずい。この状態はずっと、中学生までつづいています。そして、家庭まで学校の延長になっっているのが現状です。

ここでほくは考えるのですが、家の裏に、五歳になる直子ちゃんという子がいます。その子が「死にたい」といい、「どうしたら死ぬるか、走ってくる車の前に出たら死ぬるかな」というそうです。幼稚園で「みんなは大きくなったら何になりたいか」と先生が質問したそうです。「幼稚園の先生」という子が多くて、先生は喜んだらしい。そして直子ちゃんの番になったら「わからん」といったんだそう。そして先生は「明日までに考えていらっしやい」といったそうです。先生が喜ぶようなことをいう子どもより、ずっと直子ちゃんはいい子です。直子ちゃんは神経—感性が健康なんです。だから「死ぬ」ということも考えるのだと思います。五歳です。



ともかく、そろそろ学校信仰をやめるべきです。これに似たようなことは、永井道雄もこのごろいい出しています。

大部分の動物は、遺伝されたものをうけついで生きてゆくことができます。でも人間の場合は、「装置」として遺伝されたものを、使わなければ、それも順序をへて使わなければ、それは腐敗して、こわれてしまうのです。外山君のいうマタニティー・スクールの必要性もここにあると思います。順序をへる、つまりつめこんではいけないのです。かといって、子どもが好んでやることをとめることもいけません。しかし、からだがよくなければ、心も初期段階の発達ができなくなるのです。からだと心は不可分です。妊娠中はもちろん、お母さんの血は赤くなければいけないのです。このごろの若い女の人の血は、黄色いというではありませんか。

そして、子どもが生まれたら、おっぱいを飲ませながら子どもの目を見て「母乳語」を話し、つぎに「離乳語」にうつってゆく。これはまさに、外山君のいう通りだと思えます。この離乳語が、いわゆるおとぎ話の時代と重なり、夢み能力をつちかうのです。ベッテルハイムさんがこの間日本に来ましたが、彼はこうい

う質問をしました。「日本の親は子どもに inner-most self をどう
伝えているか」と。訳が心の奥にもつ最も大切な考え方とでも訳
すのでしようが、日本の親はこんなことはしていないと思いま
す。でもこれは大切なことです。子どもはわかるのです。いわゆ
る sensitive period (敏感期) にある子どもには、よくわかるもの
なのです。ベッテルハイムさんと話した時に一緒だった松岡享子
さんの話では、波多野(完治)さんの名でそのうち「Use of En-
chantment」(魔法の効用)という本が出るはずですが、enchantment
と entertainment は全く違います。

子どもに一つの信頼と勇気と決断を与えるのが enchantment で
す。子どもは何度もおとぎ話をせがんで、その中で自分をたしか
め、また「まっ心」も出てくるのです。entertainment は、ただ
「おもしろ、おかしい」気散しをするだけです。『誰も知らない小
さな国』の作者佐藤さとし氏は、幼年時代についてこう書いてい
ます。「幼年時代とは、どういふ風景―世界観の model を心の中
に子どもの眼と心でつくりあげ、もつことができるかの、かけが
えのない一時期」だと。いまのような「現実」では不可能といえ
ますね……。心の棲む場所―世界がどこにもないのです。そこで
反逆、自殺……さまざま不幸、禍いが出てきてやまないのです
ね。

まだ、いいたいことをつくしていませんが、要は、情緒の棲み
家に値するような「からだを作る」こと、これをもっと真剣に考
えなければならぬということです。みんなも、今日から少し食
べることをへらすことから始めたら？……からだが疲れないで心
が生き生きとすると思います。

(一九七八年三月十一日、みどり会で行なわれた講演より)

